ガダルカナル

平成18年2月4日・高根台公民館

これからお話するガダルカナルは、太平洋戦争を少しでも経験された方なら、特別な感慨を覚える、忘れられない島の名前なのではないでしょうか。軍事記者として数多くの本を残している伊藤正徳は「ガダルカナルは、単なる島の名前ではない。それは帝国陸軍の墓地の名である」と書いています。日本から南へ約六千キロ、東西百六十七キロ、南北五十二キロと四国の三分の一ほど。全島ほとんどジャングルに覆われた、ソロモン諸島の中ほどにある島がガダルカナルです。千五百六十七年、ソロモン大王の金塊を求めてペルーを船出したスペインの冒険家が二か月半ほどして辿り着いた島々で、勿論金塊は見つかりませんでしたが、それでソロモン諸島と名付けられたのだそうです。四千人ほどの原住民が住んでいて、オーストラリアの委任統治領になっていましたが、一九七八年に独立し、現在はソロモン諸島政府の首都が置かれています。しかし戦前、この島の名前を知っていた日本人は恐らく一人もいなかったでしょう。そして昭和十七年八月七日、米軍がこの島に上陸してきた時、これが米軍の本格的反攻の第一歩であり、このたった一つの島をめぐっての半年間にわたる攻防戦が、太平洋戦争の大きな分岐点になることを予感した人も、日本の陸海軍首脳部にはいなかったのです。

私が子供心に、戦争の前途に漠然とした不安を感じたのは、翌年の十八年二月九日、大本営がこのガダルカナルからの撤退を「その目的を達成せるにより、同島を撤し他に転進せしめられたり」。こう発表した時だったように思います。とにかく「勝った勝った」の威勢のいい発表ばかりで、ミッドウェー海戦の大敗も知りません。初めて聞く「転進」と云う言葉に、それまでとは何か違う、おかしな気配を感じたものでした。そして「転進」がやがて「退却、敗走」を意味するものだと知っていくわけですが、それでもこのガ島であんな凄惨な戦いが行なわれていたことは、敗戦までついに知ることはありませんでした。

日本陸軍がガダルカナルに逐次投入した兵力は三万三千六百人、そのうち八千二百人が戦死し、戦病死一万一千人。負傷者を入れると損耗率実に六六％です。しかも戦病死のほとんどが食べるものがなかったための栄養失調、つまり餓死であり、マラリアやアミーバ赤痢に倒れた人たちだったのです。太平洋戦争で最も悲惨な戦場の一つであり、国力のない日本が果てしない消耗戦に引きずり込まれて行く、その始まりでもありました。

平成十五年一月、七十九歳で亡くなられた評論家の村上兵衛さんは当時陸軍士

官学校に在学中でしたが、「初めて戦争、国家というものと鼻を突き合わせた」。こう云うほど強烈な衝撃を受けたのが、戦術教官として赴任してきたガ島帰りの参謀親泊朝省少佐の話を聞いた時だったと云います。親泊はいきなり「ガ島は餓島だ」、「飢えている島だ」と云ったそうです。「もの凄い戦いだよ。これまでの戦術常識を超えた、悲惨な、冷酷な戦いだ。みんな飢えちょる。君ら信じられるか？二十歳そこそこの現役の兵隊の足がこんなに細く」と、指を丸めて輪を作って見せたと云うのです。「痩せさらばえて、それでも銃をとって戦っておる。飯盒一杯の人肉が百円で売り買いされていると云う話も聞いた。敵のものか、味方のものか、それは云わん」。そして「余りの砲爆撃の凄さに、発狂した中隊長もおる。近頃の士官学校はどんな教育をしておるのだ、そんな声も聞いた。俺が柄にもなくここに送り込まれたのも、それとも多少関係があるかも知れん」と云います。敗戦から二十日ほど経った九月三日、大本営参謀の親泊は覚悟の自決をしています。それも奥さん、二人のお子さんを道連れにすると云う悲しいもので、遺書には「ガ島で死すべかりし命を、今宵断ちます」とありました。もっと責任をとるべき高級参謀は大勢いたのに、沖縄出身の親泊は、沖縄戦で郷里沖縄の人に大勢の犠牲者を出しことに、大きな責任を感じていたのかも知れません。

私が村上さんの話でびっくりするのは、日本陸軍がガダルカナルで負けてもなお、戦ってもいないソ連との戦いの研究ばかりをしていたことです。主戦場はすでに南方ジャングル地帯になっていると云うのに、極寒の北満州やシベリアを想定した訓練、研究をしていたと云うのです。もともと日本の陸軍は、満州に随一の精鋭部隊関東軍を配置していたように、ソ連に備えた北向きの軍隊でした。それが装備の貧弱な植民地軍に勝ってアメリカは大したことはないと、南方作戦の部隊を中国戦線や満州に転用することを考えていたくらいです。陸軍の教育総監部が「ア号教育」と云って、これはアメリカの頭文字からつけた名称なのでしょうが、戦闘方法を対米戦主体に切り替えるよう指令を出したのは、ガダルカナル撤退から半年も経った十八年八月のことなのです。その年の年末、陸軍大学校の卒業式に臨まれた昭和天皇はお付きの侍従武官長に聞かれたそうです。「対米戦苛烈な今日、依然として対ソ戦教育ばかりをしているのはなぜか？」と。参謀将校を養成する陸軍の最高教育機関が、天皇に注意されて対ソ戦教育から対米戦教育に切り替えたのは、もう戦局がどうにもならなくなった十九年に入ってからだったのです。

十九年三月に士官学校を卒業した村上さんたちは、普通ならすぐ各部隊に配属されるのに、また学生として千葉の歩兵学校に三か月間送り込まれました。「対米戦闘訓練」の幹部教育第一号でした。それも昼間は眠って演習は専ら夜と云う昼夜逆転のスケジュール。上空に敵機が乱舞し、シャワーのように銃砲火を浴びせられるのでは、日本の兵隊はもう昼間の戦争は出来ない状況に追い込まれてい

たのです。それで何を訓練したのかと云うと、まず闇夜に目を慣らす訓練、次が最初から最後までひたすら這いずり回る訓練。とにかく姿勢を高くしたら、たちまちやられてしまうのです。そして停止した時は必ず穴を掘って、そこに潜り込むモグラ戦法。新しい戦闘法といっても、この程度の泥縄式なものなのです。敵戦車のキャタピラーめがけて爆薬を投げ込む肉薄攻撃では、実物の戦車がないので赤い旗を持った兵隊が走ってくるのを目標にするんだそうです。「闘牛士じゃあるまいし」と、何とも情けない気分だったと云います。

この村上さんの話には、「敵を知らず、己れを知らず」、「戦訓に学ばず、戦訓を生かそうとしない」、日本陸軍の構造的とも云うべき欠陥体質が凝縮されているように思います。ガダルカナルの敗因は一言で云えば、情報軽視、敵兵力を過小評価したための兵力の逐次投入、武器弾薬どころか食べるものまでなくなった補給の途絶。この三点に尽きるのですが、全てはノモンハンの繰り返しでした。昭和十四年の夏、関東軍は満蒙国境ノモンハンで、ソ連軍の圧倒的な戦車、重砲に蹂躙され、大敗しました。この貴重な教訓が、少しも生かされていなかったのです。もっともその現実を直視し、冷静に分析、検討をしていたら、ノモンハンのような局地戦でさえソ連の物量戦に負けたのですから、はるかに国力の優るアメリカ相手の戦争には、とても踏み切れなかったでしょう。そのことは追い追いお話するとして、まず何でこんな南海の孤島が決戦場になったのか、その点から話してみたいと思います。

日本海軍は、アメリカが反攻してくるとすれば、それはオーストラリアを最大の基地にするだろうと考えていました。そこでオーストラリア攻撃の基地とするため、開戦一か月半後の十七年一月二十三日、早々とニューブリテン島のラバウルを占領し、第二十五航空戦隊を進出させたのです。それ以来ラバウルは「さらばラバウルよ」と「ラバウル小唄」でも歌われたように、十九年二月にラバウル航空隊が引き揚げるまでの二年間、日本海軍の最南端基地となりました。それでも米軍の方は、オーストラリア増援のためアメリカ本土から双発の新鋭爆撃機B26などを続々と送り込んできます。これはその米豪連絡路を遮断しなければダメだと、中継基地になっているフィージー・サモア諸島を攻略することにしたのです。ミッドウェー作戦終了後、七月中旬の予定でしたが、その第一段階として五月三日、ガダルカナル島対岸のラギ島を占領し、飛行艇、水上機基地にしました。しかしラバウル航空隊が航空作戦を進めるには、ソロモン諸島に前進基地が必要でした。空から偵察したところ、ガ島のルンガ川東方、海岸から二キロほど入った所に平地を発見し、そこに飛行場を作ることになったのです。陸軍もフィージー・サモア攻略部隊として、百武晴吉中将を軍司令官とする第十七軍を編成し、着々と準備を進めていました。

ところが六月五日のミッドウェー海戦で、赤城など主力空母を一挙に四隻も失

うと云う大敗を喫してしまったのです。海軍軍令部のショックは大きく、厳重な箝口令を敷いて敗戦を隠しました。パイロットなど作戦参加者全員を、各地に分散隔離したほどです。陸軍側には翌日六日の昼近くになって作戦課長の服部卓四郎大佐らを招き、フィージー・サモア作戦の中止を伝えましたが、参謀本部もまたこの敗戦を徹底的に隠そうとしたのです。軍隊の士気、国民の戦意に影響することを恐れたのですが、知らせたのは参謀総長と参謀次長、作戦部長に作戦課員だけ。それ以外は、部内の情報部長にも陸軍省にも知らせませんでした。東条英機首相も知らなかったし、長期的な観点から国防国策を立案する戦争指導班でさえ知らなかった証拠に、いつもなら必ず所見を書いている「機密戦争日誌」がミッドウェー敗戦には一言も触れていません。

当時情報部の米英情報担当だった杉田一次中佐、戦後自衛隊陸将になった杉田はこう云っています。「当座は全く知らされず、九月になってようやく知った有様だ。ミッドウェーのあれだけの敗北を知らされていたら、かなり事情が変わったと思う。作戦計画の大本を練るべき大本営の者がこんな大損害も知らずに『今後の情勢判断』などを研究させられていたのだから、陸海軍相互の秘密主義がどれだけ戦争全体の遂行を妨げていたかわからない。縄張り主義の悲劇です」。その通りでした。マイナス情報はみんなが共有してこそ、次の対策も機敏に立てられるのです。ガダルカナルの悲劇はこの秘密主義にも大きな原因がありました。

本当はこの時、そんな隠蔽工作ではなく、今後の戦略をどうするのか、根本的に検討しなければいけなかったのです。中部太平洋の制空権、制海権が不安定になったのですから、延び切った戦線はそのままでいいのか、南太平洋の戦略拠点はラバウルで止めるのか、それともガダルカナルまで出て行ってもいいのか。陸海軍で協議して根底から練り直すべきでした。ところが参謀本部作戦課参謀の井本熊男中佐、この人も戦後自衛隊陸将になった人ですが、「それが行なえるような陸海軍関係ではなかった」と云っています。日露戦争以来、陸軍は大陸、海軍は太平洋と分担を決め、バラバラに戦ってきたのが実情でした。形の上では陸海軍協同作戦になっていても、それはいつも妥協の産物だったのです。ミッドウェー作戦に最初は「そんな所に兵力を出す余裕なんてない」。こう云っていた陸軍が急に熱心になり、「攻略部隊を出す」と云ってきたのも、四月十八日の本土空襲のショックからでした。本土防空は陸軍の担当でしたから、空の哨戒線をミッドウェーまで進める必要を感じたのです。海軍がラバウル攻略に陸軍部隊の派遣を申し入れた時も、当時参謀次長だった塚田攻中将は「絶海の孤島に陸兵を出すことは海の中に塩をまくようなものだ。補給上不可能だ」と云って反対していました。それが結局応ずることになったのは、陸軍のマレー・シンガポール作戦に海軍航空部隊の支援が必要になったからで、その交換条件だったのです。陸海軍の協力は、どちらかが頭を下げる状況になった時でした。しかし孤島の維持、つま

り補給が続くかどうかは制海権、制空権に依存するのですから、塚田が云っていることは正論でした。ガダルカナルに米軍が上陸してきた時、この原則を忠実に守っていたら兵力の逐次投入といった「ガ島の悲劇」は避けられていたでしょう。

ところで海軍側はフィージー・サモア作戦は中止になっても、ラバウル防衛、米豪連絡路の遮断にはガダルカナルに基地は必要だと考え、予定通り飛行場建設にかかったのです。六月十六日に先遣隊、七月に入って設営隊の労務者二千五百人が上陸してヤシ林を切り開いていきましたが、たちまち米軍に知られてしまったのです。実はアメリカは七月二日の統合幕僚長会議でウオッチ・タワー作戦、「望楼作戦」と名付けた対日反攻計画を決定していました。それはラバウルのあるニューブリテン島からニューアイルランド島と、島から島へ陸海空一体の水陸両用作戦を進め、フィリピンから最終的には日本本土を目指そうと云うものです。ところが偵察機の報告で飛行場建設を知った太平洋艦隊司令長官ニミッツは、日本の航空部隊がガ島にに進出してくれれば作戦に重大な支障を来す。その前にガ島を抑えなければと七月十日、ガ島攻略作戦の実施を命令したのです。作戦兵力は海兵一個師団を中心に空母三隻、作戦開始は八月七日とされました。

日本の方は、そんなことは全く知りません。大本営政府連絡会議は三月七日、「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱」を決定していましたが、その際米軍の反攻を「大規模攻勢を計画してくる時機は概ね昭和十八年以降」としていました。そしてミッドウエーで敗戦しても、この判断を変更することはなかったのです。まして米軍がまさか南太平洋から、それも島伝いに躍進して来るとは思ってもいません。この戦略情報面の判断ミスは致命的でした。ガダルカナルに米軍が上陸してきても、本格的反攻は十八年以降と思い込んでいますから、せいぜい飛行場破壊か偵察上陸程度だろうと、軽く見ることにつながってしまったのです。

戦後、米軍が進駐したきた時、配給になる缶詰食品に、情けないことに「こんなうまい物を食っていたのか。負けたわけだ」と思ったものでしたが、それ以上に目を見張ったのがジープとブルドーザーです。「日本はブルドーザーに負けたのだ」、こんな声もあったくらいです。ガダルカナルでも日本の設営隊は専ら人力です。それでもシャベルにツルハシ、モッコで一か月余りかかって米軍上陸の二日前、八月五日には長さ八百㍍、幅六十㍍の滑走路を完成させました。それが米軍が上陸して二週間も経たないうちに、米軍機が盛んに飛び立つのを見て、日本側は「神業だ」と驚嘆したそうです。実は開戦直後にウェーク島を占領した時、初めて見たブルドーザーの威力が中央に報告されていました。飛行場修理に捕虜三百人の労働を命じたところ、米軍の隊長は「三人で十分だ」と答え、大型自動車に機械のついたものを動かして、たった一日で直してしまったと云うのです。しかしいくら報告はあっても、日本の工業力ではそんなところまでとても手が回りません。結局はこの機械力の差、米軍がいち早くガダルカナルの飛行場、制空権

を握ったことが、米軍勝利の最大の要因となったのです。

余談になりますが、米軍はこの飛行場を占領すると、ミッドウェー海戦で戦死した海兵隊少佐の名前をとって「ヘンダーソン飛行場」と命名し、戦後もそのまま「ヘンダーソン空港」と云われていました。それが平成十五年になって、首都ホラニアの地名をとって「ホラニア国際空港」と改名されたのですが、ソロモン諸島政府が日本のＯＤＡ資金、政府開発援助で空港整備をしたので、日本政府に対する配慮だと云われています。それはともかくとして、ラバウル航空隊はガ島に飛行場が完成し、現地から航空部隊の早期進出を要請された時、なぜすぐ派遣しなかったのでしょうか。たとえ数は少なくても飛行機を出しておけば、奇襲を受けることはなかったでしょう。ラバウル航空隊はそれまでの戦闘ですでに二十五機を失っていました。ラバウルは日本から遠く離れているため、人員・機材の補充が思うようにいきません。出撃可能機数が三十機を上回ることはなく、ガ島に兵力を割く余裕はなかったのです。しかもラバウルからガダルカナルまでは千三十キロ、東京から下関近くも離れているのです。航続距離三千三百五十キロを誇るゼロ戦にしても、普通の速度でただ飛ぶだけなら九時間は飛べます。しかし空中戦になれば、どんなに燃料が残っていても増槽タンクを捨てなければなりませんし、交戦中の燃料消費はふだんの三倍以上。ガダルカナル上空で戦えるのは、せいぜい十五分しかなかったのです。これがゼロ戦と云う優秀な戦闘機を持っていながら、ガ島で最後まで制空権を握れなかった原因でした。ラバウルとガダルカナルの間にもう一つ、中継基地が必要だったのです。

それに最前線に基地を作ると云うのに、余りにも不用心でした。設営隊を守る海軍陸戦隊はたったの二百四十七人、高射砲六門に山砲二門です。小規模な空襲に対処出来るだけで、大部隊が上陸してくればひとたまりもありません。まるで丸裸で出ていって、米軍のために飛行場を作ってやったようなものでしたが、ラバウル航空隊をはじめ現地部隊がミッドウェーの敗戦を知っていたらどうだったでしょう。緊張感が全然違っていたと思うのです。米軍上陸の第一報に軍令部参謀の高松宮は日記に、「壕ヲ掘ッテ守ル準備ヤ哨戒偵察ハドウモ日本人ノ殊ニ海軍ノ不ナレナリ」。こう書いていますが、飛行場建設と並行して海岸に防御陣地を築いておかなければいけなかったのです。ところが「わが機動部隊は健在だ」と思い込んでいますから、敵が来ても簡単に撃退してくれるだろうと、これが油断につながってしまいました。

この間、第十七軍はニューギニアのポートモレスビー攻略に乗り出していました。モレスビーは、向かい側のオーストラリアとは最短距離にある要衝で、海路攻略しようとして五月七日の珊瑚海海戦で一旦中止になっていました。それがフィージー・サモア作戦の中止で、やることのなくなった第十七軍を、今度は陸路攻撃に向けたらどうかとなったのです。この辺が軍隊と云うものの宿命なのでし

ようか。せっかく編成した軍を遊ばせておくわけにはいかない、まして連戦連勝に浮かれている陸軍です。しかし海抜四千㍍、富士山より高いオーエン・スタンレー山脈を越えて、モレスビーまでは三百六十㌔。一本の自動車道路もないジャングルを越えて行くのですから、それが容易でないことは参謀本部にもわかっていました。そこで作戦が可能かどうか、第十七軍に調査研究を命じ、その結果を見て実施を決めることにしていたのです。

ところが七月十一日、第十七軍に「ポートモレスビーを攻略確保せよ」との大本営陸軍部命令が出ました。軍司令部に派遣されてきた参謀本部作戦班長の辻政信中佐は、「東部ニューギニア方面の航空作戦を有利に展開するには、大本営としてはこれ以上調査研究の結果を待っていられない。第十七軍は速やかにモレスビーの陸路攻略に踏み切ってもらいたい」と云うのです。こうして南海支隊が二十一日にブナに上陸し、翌日には占領しましたが、これが補給のメドのないニューギニア戦の始まりでした。敗戦まで逐次投入された兵力は十四万、実に十一万以上がジャングルで白骨化したと云う、ガダルカナル以上に悲惨な戦いでした。しかもこれは、辻参謀が勝手に出した専断命令だっのです。と云うのは二十五日になって、「なお詳しい作戦研究成果の報告を待つ」。こう云う服部作戦課長名の照会電報が来て、辻の独断専行がバレてしまったのです。百武軍司令官は「辻はいろいろ問題を起こす人物と聞いているが、この際帰ってもらった方がいいのではないか」。参謀長にこう洩らしたと云いますが、すでに軍の作戦命令によって動き出した作戦は止められません。結局は中央でも問題にされることもなく、黙認されてしまいました。そして米軍がガダルカナルに上陸してきた時、本来はこの方面を担当する第十七軍がモレスビー作戦に動き出していたため、応急派兵する兵力を持たず、対応が遅れる結果にもなったのです。

米軍のガダルカナル作戦は八月七日未明、水上機基地のあるツラギ島の砲爆撃から始まりました。午前四時半「敵猛爆中」を皮切りに、次々と至急電がラバウルに飛び込んできましたが、六時過ぎ「敵兵力大、最後ノ一兵迄守ル、武運長久ヲ祈ル」を最後に、通信は途絶しました。そして午前七時、ガダルカナルで設営隊員が朝の小銃訓練にかかろうとした、まさにその時、猛烈な艦砲射撃が始まったのです。隊員がヤシの木に登ってみると、目の前は戦艦、空母など六十隻の大艦隊で埋まっています。とても戦うどころの話ではなく、食糧も何もかも放り出してジャングルに逃げ込みましたが、三十一隻の輸送船に分乗した第一海兵師団一万九千人は全く抵抗を受けることもなく、二日前に完成したばかりの飛行場を占領したのです。いつもなら朝早々と仕事にやってくる原住民が、その朝に限って一人も姿を見せません。「おかしい」と思った隊員もいたようですが、住民には「米軍の攻撃があるから、飛行場には近付かないように」との指令が出ていたんだそうです。オーストラリア海軍は広大な海岸線を守るため、開戦前からニューギ

ニアやソロモン諸島に六十四か所の沿岸監視ステーションを作っていました。ガダルカナルでも無線機を持った六人のオーストラリア人が、住民を使って情報収集に当たっていましたが、日本軍の動向は勿論、ブーゲンビル島ではラバウル航空隊がガ島攻撃に向かうたびに、監視員が「日本機何機、どっちの方向に向かう」と米軍に通報し、アメリカ側はいち早く迎撃態勢をとることが出来たのです。

ラバウルからはまず一式陸上攻撃機二十七機、ゼロ戦十八機、遅れて前日到着したばかりの九九式艦上爆撃機九機が攻撃に向かいました。午前十時半頃にはガ島上空に着いたのですが、輸送船団が上陸作戦中だと云うのに、そっちはほったらかしにして巡洋艦の攻撃に熱中してしまったのです。攻撃命令には「攻撃目標船団マタハ航空母艦」となっていても、日本海軍の「艦隊決戦主義」が災いしました。日頃から大型艦ばかりを攻撃目標に訓練していますから、どうしても輸送船を沈めても手柄にならないと云う意識が働いてしまうのです。空中戦で十二機を撃墜、駆逐艦二隻を大破させましたが、陸攻五機、ゼロ戦二機を失い、航続距離の短い艦爆隊は最初から片道覚悟の攻撃でした。四機が撃墜され、五機が不時着水して初日で全滅してしまいました。翌日の攻撃でも陸攻十八機、ゼロ戦二機が還らず、ラバウル航空隊は二日間の攻撃でその攻撃兵力の大半を失ってしまったのです。米軍の空戦能力も向上していましたが、それより何よりガ島に着くまでに三時間もかかってしまって疲れてしまう。途中に中継基地のない弱みが、もろに出てきたのです。この航空攻撃で効果があったとすれば、艦載機に損害の出た米空母三隻が日本機の攻撃を恐れて輸送船団を置き去りにしたまま、ガ島海域から逃げ出してしまったことくらいでした。

そして輸送船団撃滅に出撃した第八艦隊もまた、同じ轍を踏んでしまったのです。海戦そのものは日本側の大勝利でした。第一次ソロモン海戦と云われるもので、鳥海など重巡五隻、軽巡二隻が八日夜、ルンガ泊地に向かったのですが、途中で米豪連合艦隊と遭遇しました。砲撃戦わずか三十三分で重巡四隻を撃沈、重巡一隻と駆逐艦二隻を大破炎上させましたが、司令長官の三川軍一中将はそこで「全軍引き揚げ」を命じたのです。三川の出した作戦命令には「為シ得ル限リ、夜間、敵輸送船団の泊地ニ殺到、コレヲ撃滅セントス」。こうなっていましたし、ルンガ沖二十三隻の輸送船では戦車、重火器、膨大な量の弾薬が陸揚げされず、まだ船に積まれたままだったのです。そのまま突入すれば、護衛艦隊を失った輸送船団を撃滅するのは、赤ん坊の手をひねるようなものだったでしょう。旗艦鳥海の艦橋では、艦長の早川幹夫大佐が「参謀長、もう一遍行きましょう」と叫びましたが、司令部参謀は誰も返事をしなかったと云います。

三川はこの引き揚げ理由については沈黙を守り、生涯弁解することはありませんでした。ただ司令長官として赴任する際、軍令部総長の永野修身から「無理な注文かも知れないが、わが国は工業力が弱いから、艦の損耗には極力気をつけて

もらいたい」。こう注意されていたと云います。永野のミッドウェー敗戦のショックのほどがわかりますが、まあ余計なことを云ったものです。三川とすれば大戦果はあげたし、護衛の飛行機を伴わない裸の艦隊です。敵機の攻撃を受ける前にと思ったのでしょうが、早川大佐はラバウル帰港後、「鳥海戦闘詳報」にこう書いています。「砲弾はなお六割以上残っていたし、被害も軽微だった。再び泊地に進入して輸送船を全滅すべきだった。輸送船にはガダルカナル基地を強化すべき人員・資材を搭載していたのは明らかだ。これを全滅させれば、敵に与える心的影響は大きかっただろう」。ハワイ真珠湾攻撃の時もそうでした。戦艦は壊滅させましたが、海軍工廠や石油タンクを攻撃せず、ほとんど無傷のまま残してしまいました。ここで真珠湾の基地機能を破壊しておいたら、恐らくミッドウェー海戦の展開も変わっていたでしょう。日本海軍は日本海海戦以来の「艦隊決戦思想」にとらわれ、戦艦や空母の攻撃だけを考えて、敵の補給を叩くことが「近代戦最大の使命だ」と云うことを教えてこなかったのです。いくら大軍が上陸しても、その補給を断たれれば、陸上の部隊は立往生するしかないのです。この時輸送船団を撃滅していたら、ガ島戦の様相は一変していたでしょう。ガ島戦、最初にして最大の逸機でした。

米軍上陸の第一報が入った時、参謀本部でこの島の名前を知っている者はいなかったし、海軍が飛行場を作っていたのも初めて知った。これが定説になっています。当時参謀本部参謀だった瀬島龍三さんや服部作戦課長もそう書いていますし、陸軍省軍務局長の佐藤賢了も「無人島のような島に飛行場を建設するぐらいのことを、陸軍に相談したり通報したりする必要も、海軍は感じなかったのか」と批判しています。ところがた半藤一利さんの「遠い島 ガダルカナル」を読みますと、軍令部作戦課は七月七日、参謀本部作戦課に文書で「ガダルカナル陸上基地は最近造成に着手、八月末完成の見込み」と、ちゃんと連絡していたと云うのです。陸軍の南方での関心はもっぱらモレスビー作戦、そんな聞いたこともない島の飛行場建設など、気にも留めていなかった。これが真相だったのではないでしょうか。

しかも日本の占領地に米軍が上陸してきたのは初めてだと云うのに、陸海軍首脳部の受けとめ方は極めて楽観的なものだったのです。海軍から陸軍部隊の派遣を要請された参謀本部は、米軍はせいぜい二、三千だろうと判断しました。グアム島にはちょうどミッドウェー攻略に当たる予定だった一木支隊二千二百人が、それが中止になって内地に帰るため待機中でした。第十七軍はモレスビー作戦に動き出しており、最も迅速に使える兵力として、この一木支隊を第十七軍に編入し、ガ島に派遣することにしたのです。旭川第七師団の歩兵第二十八連隊を中心とする精鋭部隊で、隊長の一木清直大佐も支那事変のキッカケとなった蘆溝橋事件の時の大隊長、歴戦の指揮官でした。むしろ心配されたのは、日光の御用邸で

避暑中だった昭和天皇です。「すぐ東京へ帰る」と云い出されたのですが、永野軍令部総長は「安心してご逗留下さい」と止めています。偵察程度の上陸で海軍陸戦隊だけでも大丈夫だが、放っておくと敵が固まる恐れがあるので、至急陸軍と協力して奪回作戦を行なうと云うのです。参謀本部も十二日夜、第十七軍宛てに「現状ではむしろ戦機を重視し、これは急げと云うことですが、一木支隊と陸戦隊だけで速やかに奪回出来ると考えている」と、楽観的な指導電報を打っています。

まず、この敵情判断に致命的なミスがありました。敵情報告では「輸送船四十隻余り」となっていたのです。一隻五百人乗っているとしても二万の大軍と見なければいけなかったのに、なぜ二、三千と判断したのか。開戦以来の連戦連勝に浮かれて「それ敵が来た、見敵必殺だ」と云うので、情報の真剣な検討をおろそかにしてしまったのです。一木支隊は「急げ」と云うので、駆逐艦でガダルカナルに向かうことになりましたが、海軍基地のトラック島に着いてみると、輸送に使える駆逐艦は六隻だけです。詰め込んでも一隻百五十人、九百人しか運べません。ガ島の正確な地図もなく、渡されたのはガ島付近の海図と上陸地点のルンガ岬付近のガリ版刷りの略図だけでした。しかし一木大佐は「敵が二、三千なら、この兵力で十分だ」と考えたのです。第十七軍参謀に「ツラギもうちの部隊で取ってもよいか」と尋ねたほど、自信満々でした。兵隊たちも「こっちには九九式の新式銃がある。早く行かないと敵が逃げてしまう」とはやり立っていたと云います。昭和十四年に採用された九九式歩兵銃と云っても、原理、構造は明治三十八年採用の三八式歩兵銃と同じ五発弾倉です。米軍の方は引き金を引くだけで、十五発連射出来るカービン銃なのです。

いま海兵隊と云えば、それが米軍一の精強部隊だと云うことは誰でも知っています。水陸両用戦車に重砲部隊を持ち、兵隊はハンディ・トーキーで連絡を取り合い、常に攻撃の先陣を切って戦況を切り開いていく部隊です。しかも米軍は必ず艦砲射撃と爆撃で防御陣地を叩いてから、猛烈な銃砲火の援護の下に攻撃を進めてきました。日本は海洋国家ですから、本当は陸軍と海軍の間にこうした「海に慣れた陸軍部隊」があってもおかしくなかったのですが、陸軍は大陸志向、海軍は艦隊決戦思想。しかもお互いの領分に介入されるのを嫌いますから、そうした発想は生まれませんでしたし、また海兵隊に関する知識もなかったのです。

一木大佐は、駆逐艦では速射砲や重火器は運べないので、後から残りの部隊と一緒に輸送船で運ぶことにしました。こうして十六日朝、歩兵四個中隊九百十六人の第一陣が小銃弾二百五十発、七日分の食糧を携行し、軽機関銃たった八挺と云う軽装備で勇躍トラック島を出発したのです。十八日夜、米軍陣地から三十キロほど離れたタイボ岬に上陸し、翌朝三十四人の斥候隊を出しましたが、米軍は住民の通報で待ち伏せしていました。一斉射撃で三十一人が戦死、やっと三人が逃げ帰っただけでした。本当はここで敵情、地形を掴んで、後続部隊の到着を待っ

て攻撃するのが常道だったでしょう。ところが一木は飛行場の早期奪回を要求されており、また自信もありましたし、二十日夜、日本陸軍伝統の夜襲を決行したのです。米軍はテナル川に戦車、迫撃砲で防衛線を敷いて待ち構えていました。日本軍の接近と共に照明弾を打ち上げて一斉射撃が始まり、たちまち川岸から海岸にかけて日本兵の死体で埋まったのです。戦死八百人、捕虜十五人。約百人がジャングルに逃げ込みましたが、包囲された一木大佐も翌日午後三時、軍旗を焼いてピストル自決、一木支隊の総攻撃は一方的な戦闘で失敗に終わったのです。

実は一木支隊の派遣が決まった時、陸軍省軍事課長の西浦進大佐が反対していました。「補給、増援が難しい絶海の孤島にひとたび陸軍部隊を派遣すれば、ノモンハン事件のような将来の見通しもなく、兵力の逐次投入にならないか。ことに軍旗を奉ずる一木支隊の戦闘加入は、今後の作戦指導を硬直化することにならないか」。こう云って服部作戦課長に再考を求め、東条首相にも「ここは一歩後退して、防衛を強化すべきではないか」と意見具申していました。しかし東条は杉山元参謀総長から「状況急を要する」と云われ、兵力投入に同意した後だったのです。皆さんもご記憶でしょうが、昭和四十七年二月、横井庄一伍長がグアム島から二十八年ぶりに帰国した時、その第一声は「天皇陛下よりお預かりした三八式歩兵銃は、ちゃんと持って帰りました」でした。銃身には菊の御紋が打ってあり「軍人の魂」と教えられてきたのです。まして軍旗となれば、天皇から直接授けられた軍隊団結のシンボルです。その軍旗を奉ずる一木支隊が全滅したと云うので、「陸軍の名誉」にかけてもと、一木支隊より規模の大きい旅団単位の川口支隊を出せと、西浦が心配した通り兵力の逐次投入となっていきました。海軍も第一次ソロモン海戦の大勝利に気をよくしていたのでしょう、楽観していました。米軍の上陸はいわば人質をとったようなもので、この人質がある限り敵艦隊はガ島周辺をうろつくはずだ。「今度こそ艦隊決戦だ」と意気込みました。ところが人質をとられたのは日本の方で、これが果てしない消耗戦の始まりだったのです。

私はこの話の最初に「全てはノモンハンの繰り返しだった」と云いました。昭和十四年五月から八月にかけてのノモンハンの戦いは、昭和の日本陸軍が初めて経験した本格的な近代戦であり、しかも惨憺たる敗戦でした。情報無視に補給の限界、貧弱な装備・兵器。こっちが一発大砲を撃つと、たちまち一分間に百二十発も撃ち返されてきた圧倒的な火力の差。それは日本軍の一週間分の砲弾量なのです。そして参謀たちが常に敵の兵力を少なめに見積もり、敵情判断が不十分かつ主観的だったからでした。まさに「ガダルカナルの悲劇」を予告するものでしたが、このガ島戦の作戦指導をしたのが、実はノモンハン敗戦で一番責任のある服部卓四郎作戦課長と辻政信作戦班長と云う「ノモンハン・コンビ」だったのです。

× ×

ノモンハンでのソ連軍の動員力は桁違いなものでした。昭和十四年八月二十日

の総攻撃では、五万七千の大軍が戦車五百台、装甲車三百八十台を先頭に、火砲五百四十門、飛行機五百機に援護され一斉に襲いかかってきたのです。対する日本軍三万には火砲百門、戦車は一台もありません。ところが関東軍作戦班長だった服部卓四郎は、「機密作戦日誌」にこう書いているのです。「我の最も好機に敵が攻勢に転じたるものにして、この機会において敵を捕捉し得るものと信じたり」。一体何を我の最も好機と見たのか。作戦参謀の辻政信も「まさかソ連があのような大兵力を、あの草原に展開出来るとは夢にも思わなかった」と、無責任そのものです。しかし情報はちゃんとあったのです。ソ連大使館付武官の土居明夫大佐はソ連軍大攻勢の気配を感じて、自分の目でシベリア鉄道の輸送状況を確かようと、六月上旬モスクワを出発しました。夜も寝ないで追い越して行く列車の数を数え、「ソ連は極東に大機械化部隊を送っている」。関東軍にこう警告したのですか、辻が何と答えたのかと云うと、「ソ連軍の戦車を持ってきて戦勝祝賀観兵式をやろうと思っているんだ。余計なことを云うな」。情報を無視し、武器弾薬もろくに与えずに参謀たちが将兵に要求したのは「必勝の信念」だけでした。

しかもこのノモンハン事件は、関東軍参謀の火遊びなのです。外モンゴル騎兵が馬に草を食べさせるため国境のハルハ川を越えてきたのですが、人が住んでいるわけでもなく、「国家の威信」を賭けて戦争をするような場所ではないのです。ところが支那事変で他の部隊は手柄を立てているのに、精鋭を誇る関東軍は閑でした。「関東軍の力を見せつけてやれ」となったのですが、敗戦の責任を問われたのは勇戦奮闘した第一線部隊長でした。三人が無断撤退で自決させられたのに、服部と辻は「将来有用な人物」と云うことで、一時的に閑なポストに左遷されただけだったのです。それでも戦闘組織としての欠陥を余すところなく暴露したのですから、敗因をしっかり分析し検討していれば、貴重な教訓になるはずでした。ところがこの時も陸軍がしたことは、敗戦を徹底的に隠すことだったのです。

一応ノモンハン事件研究委員会を作り、その報告書の結論は「水準の低い火力戦能力を速やかに向上させる必要がある」となっていました。しかし火力を充実させようとしても、コストがかかり過ぎて日本の国力では出来ません。相変わらず強調されたのは「陸軍伝統の精神威力」、つまり白兵戦中心の銃剣突撃主義だったのです。そして武器兵器のことを云えば、「ソ連恐怖症」の烙印を押され排斥されていきました。本当は火力を充実させようと思っても出来ない、この国力の限界をきちんと認識することが大切だったのに、結局は物的国力に何ら見るべきものがないまま、太平洋戦争に突入してしまったのです。例えば太平洋戦争中の日本の主力戦車は、昭和十二年採用の九七式中戦車です。歩兵の援護用に作られたので装甲は二十七ミリと薄く、ノモンハンでも兵隊たちが「お豆腐みたい」と嘆くほど貧弱なものでした。十六年に対戦車戦用として一式中戦車を作りましたが、それでも装甲五十ミリ、戦車砲の口径は四十七ミリ。しかも生産されたのは、たった

の五百七十台でした。アメリカの方は七十五ミリ砲搭載、装甲七十五ミリのシャーマン戦車を五万台も作っていたのです。

実は開戦前、昭和十五年九月に参謀本部作戦課長に土居明夫大佐が就任していました。作戦課長と云うのは代々、作戦畑を歩んだ者だけが起用される参謀本部最右翼のポストで、そこへ情報畑の土居を持ってきたのは異例の人事でした。参謀人事担当の参謀本部総務部長が、「作戦用兵の基本は正しい情報把握にある。それには作戦部門に情報のエキスパートを入れる必要がある」。そう考えてノモンハンを教訓にした人事だったのですが、土居の下で作戦班長として返り咲いたのが服部です。服部は補給担当の戦力班長に気心の知れた辻を持ってこようとして、事毎に土居と対立しました。最後は土居が作戦部長の田中新一中将に、「服部を出すか、俺を出すか決めてくれ」となったのです。田中が選んだのは服部でした。服部は十六年七月一日付で作戦課長となり、中佐の課長はこれも異例でしたが、翌月には大佐に昇進しています。ガダルカナル戦で解任された時も、その転出先は陸軍大臣秘書官。十か月ほどでまた作戦課長に戻っていますから、陸軍切っての俊才としてよほど期待されていたのでしょう。そして辻は戦力班長となり、田中、服部、辻という対米開戦派が参謀本部を牛耳ることになったのです。

瀬島龍三さんに云わせると、「田中は外柔内剛、ほとんど全ての面で強気で臨み、部下にとっては頼もしい上司だった。服部も外柔内剛、辻は外剛外剛」。要するに強気の者が揃ってしまったのですが、瀬島さんは「この三人が実質的に作戦部全体の方向、陸軍全体の方針に直接関与した。歴史を振り返ると、この時期における最高統帥作戦部の人材配置については、三思させられる、よく考えさせられることがある」と、遠慮がちに批判しています。結局は陸軍の教育システムそのものに、大きな欠陥があったのではないでしょうか。

陸軍省や参謀本部の中央部へ行くのは、陸大卒業生に限られていました。ところが、中学出身で陸大に進むのは幼年学校出の半分もなく、勢い中央の要職は幼年学校組が占めることになります。その幼年学校で教えたのはフランス語、ドイツ語、ロシア語です。明治の陸軍が最初フランス式を採用し、やがてドイツ式に代わり、ロシアが常に仮想敵国だったからですが、これがアメリカに薄い海外駐在システムとなって表われたのです。陸大の成績優秀者は卒業後、外国駐在員として派遣されますが、ドイツに百四十四人、フランス八十五人、ロシアにも七十六人行っているのに、英語の中学出が行くアメリカは四十四人に過ぎません。作戦部長の田中はソ連、課長の服部はフランスで、辻は海外経験がありません。陸軍大将百三十四人のうち、アメリカ駐在経験者はわずかに四人でした。アメリカと戦うとなった時、アメリカのことをよく知っている者が、陸軍中央部にほとんどいないと云うことになってしまったのです。陸大で研究したのは専ら対ソ戦でしたし、作戦課にも英語組はいません。ただ一人例外と云ってもいいのが、陸軍

省軍務局長の佐藤賢了です。佐藤は中学出で米国駐在二年の経験を持っていましたが、ガダルカナル敗退後、十八年三月の議会で「アメリカは大したことはない」と、こんな演説をしているのです。「将校の戦略戦術は幼稚で、実戦的な大兵団の運用など全くやったことがない。軍紀風紀、ことに軍人精神に至っては欠陥だらけだ」と云うのですが、アメリカで一体何を見てきたのでしょうか。

情報部の体制もお粗末なものでした。開戦前後の三人の情報部長はいずれもドイツ通、ソ連通。アメリカの自動車工場も油田地帯も見たこともない人が、米国関係の情報をリードしたのです。情報部で英米課が独立したのも、開戦から一か月半も経った十七年一月です。ロシア課を作ったのは十一年ですから、いかに対ソ情報一辺倒で、対米情報を軽視していたがわかります。しかも作戦課で顕著だったのは作戦優先、情報軽視の体質でした。作戦課の会議に情報関係の参謀が呼ばれることはなく、相談さえしなかったと云います。井本熊男中佐は「およそこのくらい、相手国の実情を知らずに戦争に突入した例は、世界戦史上稀ではないか」と云っています。その上トップが率先して現状を把握し、対処するといったことをしませんでした。陸軍首脳で南太平洋の戦場をその目で見た人は、一人もいないのです。アメリカの太平洋艦隊司令長官ニミッツはガダルカナル戦最中の十月一日、空路ガ島に飛んで最前線を視察しています。参謀総長の杉山元は「便所のドア」と陰口された人です。あの頃の公衆便所は、ドアがどっちにも開く両開きです。つまり定見がなく、押しの強い方に流されると云う意味ですが、強気一点張りの作戦部トリオの意見に、ただハンを押すだけの存在だったのです。

作戦部の中でも常に積極論でリードしたのが辻政信でした。辻は開戦直前、マレー作戦の主任参謀として出て、シンガポール攻略の輝かしい武勲を引っさげて参謀本部作戦班長に戻ってきたのですが、井本中佐は「一言で云えば超人ですわ」と云っています。「非常に個性が強く自負も強い。その上弁舌が優れているから、大抵の場合、辻の意志通りに引きずられて行く結果になる」と云うのです。第二十五軍司令官として辻を使った山下奉文大将は、日記に「我意強く小才に長じ、所謂こすき男にして使用上注意すべき男なり」と書いています。高松宮日記にも辻が出てきます。辻のマレー作戦武勇談が新聞に載っていたのですが、「自分の手柄話であり、作戦主任が一人が作戦を切り回す。司令官などはロボットと云わぬばかりの書きぶりだ」。また士官学校在学中に辻の講演を聞いた村上兵衛さんは、「要するに辻参謀は弾雨飛び交う第一線に勇敢に進出し、部隊のシリを叩きながら、前進に次ぐ前進を督励をしただけのようであった。血を流させるだけなら、参謀など必要ないじゃないかと思った」と云っています。こうした功名心に燃え、ノモンハン敗戦に反省どころか、全く責任を感じていない男がガダルカナル戦の作戦指導をしたところに、悲劇があったように思います。

一木支隊が全滅しても、参謀本部はまだ米軍を甘く見ていました。ちょっと兵

力を多くして、川口清健少将率いる歩兵第三十五旅団四千人送ることにしたのです。しかしこの時すでにガ島の制空権は飛行場を握った米軍に奪われていて、一木支隊の第二陣もガ島に近付けません。八月二十四日には、空母翔鶴、瑞鶴を中心に新しく編成した第三艦隊と、アメリカ機動部隊との間で第二次ソロモン海戦となったのですが、空母エンタープライズを大破させたものの、日本側も小型空母龍驤が沈没しました。ソロモン海域ではこの後、連日のように大小無数の海戦が行なわれますが、アメリカ側はレーダー装備の艦艇を配備し、暗闇でも正確に砲弾を撃ち込んでくるようになったのです。日本海軍伝統の夜戦が通用しなくなり、制海権も次第に奪われていきました。連合艦隊は二十五日、ガ島への船団護衛が難しくなったとして、駆逐艦による夜間輸送に切り替えたのです。

駆逐艦と云うのは、高速で水雷攻撃にあたるのが本来の任務です。それが運送屋になって、闇夜に紛れて猫の目を盗む鼠にたとえ、半ば自嘲気味に「鼠輸送」と云うようになりましたが、駆逐艦一隻で運べるのは兵隊百五十人、軍需品百トンが限度。輸送船の五分の一にもなりません。食糧を詰めたドラム缶を百個ほど麻縄でつなぎ、それを駆逐艦の両舷側に吊して、深夜海岸近くで投げ入れるのだそうです。すると兵隊が何人か泳いできて、運動会の綱引きよろしく海岸に引っ張り揚げ、大急ぎでジャングル内に運び込みます。こうして必死で運んだ食糧、弾薬も、一夜明けると米軍機の爆撃で焼き払われ、手に入ったのは必要量の三分の一にもならなかったと云います。最後は「海底トラック」と云って、潜水艦の魚雷発射管に袋詰めの食糧を積み込み、海岸目掛けて発射したと云うのですが、補給の限界はもう「鼠輸送」になった時点で、目に見えていたのです。

それでも川口支隊主力と一木支隊の第二陣四千人は八月三十一日夜、駆逐艦輸送によりタイボ岬に無事上陸出来ました。激しいスコールが幸いして、米軍機に見つからずにすんだのです。しかし大型発動艇六十隻の別動隊千人は、スピードが遅いのでこれを「アリ輸送」と云いましたが、米軍機の攻撃で二十隻が沈められ、ガ島西北端のエスペランス岬に上陸出来たのは五百五十人ほどでした。日本兵の姿を見て、ジャングルから一木支隊や設営隊の生き残りが出てきます。ボロボロの軍服、青ざめた顔。靴もなく、両手を差し出し「食べるものを」とねだります。背負っていた米を与えた川口支隊の兵隊たちも、まさか同じ運命がすぐ自分たちを見舞おうとは、思ってもいなかったのです。

川口支隊の総攻撃は九月十三日夜、飛行場南側の丘の攻撃から始まりました。この丘を越えればすぐ飛行場です。手榴弾を投げ込み擲弾筒を発射させながら、撃たれても撃たれても突撃してくる日本兵に、米軍の戦線は混乱しました。逃げ出す海兵隊員も出て、隊長のエドソン中佐はその胸ぐらを掴んで手榴弾を握らせ「死にたいのか。生きたかったら、こいつを奴らに叩きつけるんだ」と怒鳴ったそうです。日本兵が何度か突破しても、その都度圧倒的な火力に撃退されました。

米軍がこの丘を守り通せたのは、迫撃砲一門で二千発も撃ち続けた結果だったのです。丘の前には日本兵の死体が折り重なり、「血染めの丘」と呼ばれるようになりましたが、川口支隊はその半数を失ってジャングルに退却していきました。兵隊たちは「味方にあと一個連隊あったら」、「あの朝、もう二つお握りがあったら、飛行場は完全に取れたのに」と、悔しがったと云います。

実は海兵隊の方も疲労の極に達していたのです。輸送が思うようにいかず、上陸以来三十八日間も補給を受けていませんでした。日本陸軍は「敵さん給与」と云って、食糧は敵から奪うのを常識にしていましたが、米軍を食いつながせたのがまさにその「敵さん給与」、日本の設営隊が残していったお米だったのです。それでも一日二食がギリギリ、マラリア患者が増え、体力も気力も衰えていました。当時軍令部作戦部長の福留繁中将は戦後、あるアメリカ海軍首脳から「重大な危機があった」と打ち明けられたそうです。それは川口支隊の攻撃の時、やがて日本軍が送ることになる師団規模の兵力を投じていたら、「米軍は敗退していただろう」と云うのです。まさに参謀本部の「兵力小出し」のミスでした。海兵隊に増援部隊がやって来たのは、四日後の十八日です。第七海兵連隊四千人が食糧、弾薬をたっぷり持って到着し、米軍の士気は挙がったのです。

川口支隊の敗北は、さすがに参謀本部にもショックでした。本当はここでガダルカナルが作戦上絶対に必要な場所なのか、戦略的価値検討をすべきだったのです。ところがこれまでの失敗は、不十分な兵力で攻撃を急いだためだ。十分な兵力で周到な攻撃態勢をとれば奪回は可能だと、支隊の寄り合い所帯だった第十七軍に仙台の第二師団、名古屋の第三十八師団を増強し、作戦指導参謀として辻を派遣することにしたのです。戦力班長の高山信武中佐、この人も戦後自衛隊陸将になった人ですが、「むしろガ島は放棄し、本格的防御地帯を構築すべきではないか」と進言したところ、辻はこう云ったと云うのです。「今や戦機だ。今ガ島を敵に委したら、敵に勢いを与えることになる。わが精鋭なる皇軍の精神威力の向かうところ、何の恐れることがあろう。貴様に忠告するが、参謀たる者、絶対弱音を吐いたらいかん。退却などという言葉は絶対口に出すな」。高山は作戦部の空気は、「強硬論者は勇者であり、慎重論者は卑怯者のような印象を与えた」と云っています。「ただ前進あるのみ」の辻は、高松宮日記にも出てきます。ガ島戦が絶望的になった十一月末から十二月中旬の日記に、「辻は初めからの関係上、二、三個師団は潰してもやると云っている」とか、「この頃カンカンになっていて話にならない。ガ島をやると云うだけで、静かに考える余力もないようだ。大丈夫やれるとだけで、ほんとにやれる工夫をしないようだ」とか。

その辻が中心になって立てた作戦計画は、第二師団を主力に歩兵一万七千五百名、火砲百六十門、糧食三十日分をガ島に送り、十月二十日頃総攻撃をかけようと云うものでした。問題はこの重火器や食糧を、どうやって運ぶかです。大輸送

船団を組むしかありませんが、それには連合艦隊の全面的な援護が必要でした。しかしこの辺が辻と云う人の迫力なのでしょう。九月二十九日、トラック島の連合艦隊司令部に乗り込み、司令長官の山本五十六に直談判して承諾を取り付けたのです。第二師団は十月一日から駆逐艦輸送によりガ島上陸を開始しましたが、第十七軍参謀長の二見秋三郎少将が更迭されました。慎重論を唱えたのが、総攻撃を前に消極的だと嫌われたのです。師団司令部に呼ばれた川口少将も、戦力の貧困、とくに飢えと疲労、地形の険しさ、敵戦力の強大さを縷々説明したため、その悲観的な報告が司令部の反感を買いました。川口はやがて総攻撃直前、敵前で攻撃隊長を解任されますが、その伏線はここにあったのです。

しかし、ガ島の飢えは日々進行していたのです。十月九日、ガ島に上陸した百武軍司令官を驚かせたのが、初めて見る悲惨な実情でした。川口支隊の兵隊は敗退してから二十六日間、一木支隊に至っては四十九日間も満足に食べていないのです。トカゲは一番のご馳走で、日本軍の行動範囲から姿を消しました。清流にも小魚の影が見えなくなりました。たまにありつくマッチ箱一杯ほどのお米は、米粒の長さを少しでも長くしようと、蝋燭の火でゆっくりゆっくり重湯にし、二ヶにも三ヶにもして食べるのだそうです。百武軍司令官は二見に代わってラバウルに着任した参謀長の宮崎周一少将に、「川口支隊は餓死に瀕しつつあり。人員輸送を中止し、糧秣および飛行場制圧用弾薬のみ急送すべし」と命じたのです。

第二師団の重火器、食糧の輸送は、高速輸送船六隻により十月十五日に行なわれることになりました。連合艦隊はそれに先立って、艦砲射撃で飛行場を制圧しようと「戦艦の殴り込み」をかけたのです。十三日夜、戦艦金剛、榛名がルンガ沖に進入し、一時間十分にわたり十四吋砲弾九百十八発を撃ち込みました。「三式弾」と呼ばれる新式兵器で、爆発すると親指大の焼夷弾一千個がホウキ星のように飛び散り、弾薬、ドラム缶に引火して、飛行場は火の海に包まれたのです。飛行機九十機のうち四十八機を破壊し、滑走路も一時使用不能になりました。その破壊力は「野砲千門に匹敵する」と云われたほど凄いものでしたが、真珠湾攻撃隊の総隊長淵田美津雄中佐が連合艦隊の参謀に「なぜ、もっと威力の大きい十八吋砲の大和、十六吋砲の長門を使わないんだ」。こう尋ねたところ、その参謀は声を潜めて「実は燃料が足りないので」と答えたと云います。大艦隊を動かすには、燃料不足の悩みが出ていたのです。しかしガ島奪回の成否は、一に飛行場制圧にかかっていたのですから、ここは何をおいても連合艦隊の総力を結集すべきでした。結局は「戦艦は艦隊決戦の主力」、この考えが、海軍に宝の出し惜しみをさせました。戦艦大和はその十八吋砲の威力をほとんど発揮することもなく、沖縄特攻作戦で沈むことになります。

艦砲射撃は十四日、十五日も巡洋艦によって行なわれましたが、米軍の飛行場修復能力は驚異的でした。まさにブルドーザーの威力です。輸送船団は十五日朝

揚陸作業中に爆撃され、一隻が沈没、三隻が炎上しました。陸揚げ出来たのは食糧十日分ほど、肝心の火砲も三十八門、そのうち重砲はわずか二門でした。砲弾も一門二百発しかないのに、米軍の方は火砲百八十門。それも一門で一日二千発以上も撃ってきたのです。しかも万全の迎撃態勢をとって待ち構えていました。陣地の前に感度のいいマイクロフォンを埋設し、日本兵がそこを通ると砲兵の信号所にポンと信号があがって、すぐそこに砲火を集中してきたのです。ジャングルの木の枝には「時限小銃弾」を吊して、十分間隔で炸裂させました。驚いて応戦した小銃音で、日本兵の所在を掴む仕組みです。

第二師団は二十二日に夜襲攻撃の予定で、ジャングル突破の前進を開始しました。飛行場まで八十六キロ、工兵隊がジャングルの下枝を切り払って開いた幅五、六十センチの小道で、丸山政男師団長の名前をとって「丸山道」と命名されました。砲弾を一発ずつ持って一列縦隊で進みましたが、密林に迷って行きつ戻りつするうち疲労が重なっていきました。食糧五日分に、重機関銃や大砲も分解して背負って運ぶのです。重みに耐えかねて砲弾が道端に捨てられ、マラリア熱で木の根元に横たわる兵隊が増えていきました。攻撃隊の足並みが揃わないため総攻撃は二十四日に延期されましたが、右翼攻撃隊長の川口少将が指示された攻撃正面は、前に大きな損害を出した「血染めの丘」でした。川口は「まともにぶつかったら勝ち味はない」と、丘を右に回って草原地帯からの攻撃を意見具申しましたが、師団司令部の方針は変わりません。二十三日午後、再考を求めた川口に三十分後にかかってきた電話は、「閣下は右翼隊長を免ぜられました」と云う罷免通告だったのです。臆病風に吹かれたと見なされたのです。

総攻撃は豪雨の中、二十四日夕方から始まりました。第一線を突破しても、第二、第三の堅塁に阻まれ、圧倒的な砲火に損害が続出したのです。とにかく伏せて頭を上げようとすると、その三十センチ上は機関銃弾の幕だったと云います。この間、右翼隊から「飛行場占領」の電話がかかってきて、すぐ占領の暗号「バンザイ」が打電され、参謀本部や連合艦隊司令部は文字通り万歳に沸きましたが、間もなく草原を間違えたんだとわかって余計がっかりさせました。左翼隊の歩兵第二十九連隊は敵陣を突破したものの包囲され、連隊長の古宮政次郎大佐は軍旗を切り裂いて土の中に埋め、「眠たし」と云って自決したそうです。遺体は米軍に収容されましたが、遺書にはこうありました。「多くの将兵を無駄死にさせ、かかる結果を招きたることは慚愧にたえず。吾人は火力を軽視すべからず。火力十分なれば兵の行動は果敢となり、その気力また充実するも、火力不足なれば消極的ならざるを得ず。魂は万古不滅なり。数日間の疲労激しく、眠たし。本日、天命を終うるにあたり悔いなし」。その通りでした。精神力が高まるのも「火力あってこそ」と云う、この単純な真理が、参謀たちには最後までわからなかったのです。

左翼隊長の那須弓雄少将はマラリアで熱は四十度を超えていましたが、二十五

日夜、弱った体を軍刀で支え、再度突撃の先頭に立ちました。しかし第十六連隊長はじめ、大隊長、中隊長と指揮官が相次いで倒れ、二千名余りの死体を残してジャングルに後退していったのです。那須も胸に命中弾を受け、担架で師団司令部に運ばれましたが、出迎えた丸山師団長に弱々しく手を差しのべ、何か言いたそうに口を開きかけて、こと切れたと云います。百武軍司令官は二十六日午前六時、攻撃中止命令を出し、第三回総攻撃も失敗に終わったのです。

連合艦隊は第二師団の攻撃に呼応して艦砲射撃をする予定でしたが、攻撃予定日が一日また一日と延期されていきます。燃料の関係もあり、南下するか北へ引き揚げるかジリジリているところへ、敵機動部隊の動きが出てきて二十六日の南太平洋海戦となったのです。空母ホーネットを撃沈、エンタープライズを大破させたのに対し、日本側は空母翔鶴小破、瑞鳳中破でした。一応日本側の勝利でしたが、大本営は二十七日夜、軍艦マーチの鳴り物入りで「空母四隻、戦艦一隻、艦型未詳一隻撃沈」と派手に発表したのです。ウソの発表と云うよりは誤認による誇大戦果でしたが、参謀本部は第二師団敗戦に対する当て付けとったのか、「機密戦争日誌」は忿懣もあらわにこう書いています。「ソロモン方面陸軍戦況全く頓挫せり。然るところ海軍作戦は意想外進展しありて同慶に堪えず。第一部長、これは作戦部長のことですが、開戦以来未だ曾てなき屈辱を感ずと述懐せらる」。味方の勝利を屈辱と感ずるあたり何とも困ったものですが、実際は未帰還六十九機、不時着水二十三機と、艦載機に大きな損害が出ていたのです。それも真珠湾以来の歴戦のパイロット、名人芸に近い技量の持ち主が多く帰ってきませんでした。これだけの技術を養成するには何年もかかります。物だけでなく、人の面でも後が続かない、国力の浅さが表面に出てきたのです。

それでも大戦果だと思っています。敵機動部隊はしばらくは動けないだろうと云うことで、第三十八師団は予定通り投入することになりました。師団主力を乗せた輸送船十一隻は十一月十二日に出発しましたが、護衛に当たった日本艦隊とアメリカ艦隊との間で第三次ソロモン海戦となったのです。米軍機の攻撃で戦艦比叡、霧島が沈没し、連合艦隊はこれ以後、ガ島に大兵力を投入することは二度とありませんでした。主力艦の損失を避けることもありましたが、それ以上に内地在庫の石油が百万トンに減っていたのです。制海権は完全に米軍に奪われ、十四日にガ島に辿り着けた輸送船はたった四隻。それも翌朝の砲爆撃で軍需品が焼き払われ、上陸出来たのは二千人に過ぎませんでした。

実は陸軍が米軍のガダルカナル上陸を国民に明らかにしたのは、十一月十四日のことだったのです。それまで、海戦や空中戦の華々しい戦果発表はありましたが、地上戦については形勢が悪いものですから、陸軍は沈黙していました。ところがこの日、第三次ソロモン海戦の戦果発表に合わせて初めて、それも陸軍報道部長の談話の形で「八月頃米軍がガ島に大挙上陸し、わが陸軍部隊は困難な状況

下に数次にわたり上陸作戦を敢行した。これらの海戦も、この陸戦によって引き起こされたのだ」。こう発表したのですが、「戦っているのは海軍だけではない。陸軍もやっているんだぞ」と、対抗意識剥き出しのものでした。新聞には「陸軍省検閲済」のマーク入りで、「ガダルカナル島で進撃する我が〇〇部隊」の写真が掲載されましたが、それはすでに全滅した一木支隊を撮影したものだったのです。

ガ島の陸軍兵力は数の上では三万人になりましたが、まあ「絵に描いた餅」みたいなものです。戦闘に耐えられるのは四千人ちょっと余り。動けない者が陣地の守備、杖を頼りに動ける者は食糧運搬や炊事に当たり、杖なしで動ける兵隊が斥候や斬込隊として出ていったのです。ほとんどがマラリアやアミーバ赤痢に冒され、全将兵が急速に飢えていきました。驚くのは、ここまできても撤退を言い出す者がいなかったことです。陸軍はまだ「断固奪回」の姿勢を見せていました。十一月十六日、ガダルカナル担当の第十七軍とニューギニア担当の第十八軍を指揮するため第八方面軍を新設して、今村均中将を軍司令官に任命したのです。第一線は、命令に従って最後まで戦い抜くしかありません。中間司令部も、どこまでも与えられた任務の遂行です。大局を見て撤退すべきかどうかを判断するのは、まさに統帥権を握っている参謀本部の使命なのです。ところが内心撤退しかないと思っていても、自分の方からは言い出したくない。陸海軍の意地と面子の張り合いがありました。連合艦隊参謀長の宇垣纏中将は、十二月九日の日記にこう書いているのです。ガ島問題の発端は海軍側の不用心にあった。そして陸軍を何度も引っ張り出し、海軍側は手柄を立てたのに「ガ島は餓島なり」の惨状になっている。行き掛り上、海軍から奪回不能を持ち出すのはまずい。「陸軍に止むを得ないとわからせるのが肝要だ」と云うのです。人命よりも面子が大事と云う、驚くべき戦争指導の空白でした。

それが撤退に向けて遅蒔きながら動き出したのは、実はガ島戦で輸送船が壊滅的な打撃を受けたからだったのです。陸軍がガ島に新たな兵力、軍需品を送るには七十万トンの船舶が必要でした。そこで参謀本部はとりあえず船舶の徴用を三十七万トン増やすよう陸軍省に申し入れたのですが、軍務局は反対です。民需用の船舶が足りないため鉄鋼生産が大幅に落ち込んでおり、むしろ徴用船舶の解除が必要で、新たな徴用などとんでもないと云うわけです。東条首相も「このまま行けば国家は破産状態になる」と云っていたほどで、あくまで「ガ島戦継続」を主張する参謀本部と、「生産力重視」の政府との対立になっていきました。しかし十二月五日夜の臨時閣議は、十六万トンの増徴しか認めず、さらに十八年四月以降陸軍に十八万トンの徴用解除を求めることを決定したのです。この数字はガ島戦の中止を意味します。軍務局長の佐藤は田中作戦部長に呼び出され、いきなり殴られたので殴り返したと云っています。田中はあきらめずに六日夜、東条に「今ガ島で敗退したら南太平洋は総崩れです。弱気でガ島を捨てたら、一年後の日本はどうな

るか」。こう云って再考を迫りましたが、東条は譲りません。最後は「それでも貴公は陸軍大臣か、この馬鹿野郎」と怒鳴ってしまったと云うのです。田中は七日、重謹慎十五日を言い渡され、作戦部長も綾部橘樹少将と代わりましたが、統帥権を盾に「作戦の都合」一本で押しまくってきた参謀本部が、初めて政府側に屈した場面でした。

それでも十二月十日の政府大本営連絡会議では撤退問題はまだ議題にもなっていないのです。杉山参謀総長はこの日のメモに、ガ島攻略はラバウル確保にも絶対必要だとして「ガ島の三万を撤退させるのは、攻略するよりさらに困難だから余計そうだ」と書いているくらいです。参謀本部には、これだけの兵力の撤退には船も必要だし、制空権、制海権がない中で行なうのは至難の業だ。それならそのままガ島に残して持久戦態勢をとらせた方がいい。こうした意見が強かったのです。その流れが変わったのは、十四日付で服部に代わり真田穣一郎大佐が作戦課長になってからでした。真田は早速十九日にラバウルに飛びましたが、陸軍も海軍も誰も撤退を口にしません。しかし攻撃にほとんど確信を持っていないことは、はっきりわかりました。同行した瀬島龍三さんが「今や大本営の責任において決断すべきです」と云うと、真田は瀬島さんの手を握り締め「全く同感です。それで行きましょう」と云ったそうです。二十五日夜帰京した真田は杉山参謀総長に報告し撤退の方針が決まりましたが、ここからがまだ長いのです。二十七日から陸海軍作戦課の合同図上演習をやって、お互い撤退は口に出さないまま、まず奪回作戦不可能の判定を出し、その上で撤退作戦の検討に入ろうと云うのです。

前線は飢えていると云うのに、何という意志決定の遅さでしょうか。二十三日には百武軍司令官から「糧食皆無ニシテ、モハヤ一兵ノ斥候モ出セズ、敵ノ攻勢ニ対シテハ全ク処置ナシ。第十七軍ハ餓死センヨリハムシロ全員敵陣地ニ斬リ込ミ、玉砕ヲ希望シアリ。御許シヲ乞ウ」。こんな悲痛な電報がきているのです。アウステン山に籠城した川口支隊第百二十四連隊の二十二歳の連隊旗手小尾靖夫少尉は、二十七日の日記に「アウステン山に不思議な生命判断が流行り出した。限界に近づいた肉体の生命の日数を、統計の結果から、次のように別けた」と書いています。それは、立つ事の出来る人間の寿命は三十日間、体を起こして座れるのは三週間、寝たきり起きれないのは一週間、寝たまま小便をするのは三日間、ものを云わなくなった者は二日間、そして瞬きしなくなった者は明日。「この非科学的であり、非人道的な生命判断は決して外れなかった」と云うのです。

ガダルカナル撤退が正式に決まったのは、十二月三十一日の御前会議でした。瀬島さんの話だと、宮中の新年行事を考慮して一月四日に予定していたところ、昭和天皇の「第一線のことを考えれば、年末も年始もない」。このお言葉で急遽、異例の大晦日の会議となったのだそうです。そして十八年一月四日、捲土重来を期して「ケ号作戦」と名付けられた大本営の撤退命令が出たのです。撤退作戦は二

月一日から七日まで、三回に分けて高速輸送船主体で行なわれることになりました。人員収容を優先し、兵器は放棄してもよいとされましたが、それが全て二十隻の駆逐艦に代わったのは、山本連合艦隊司令長官の「輸送船では犠牲が多くなる。動ける駆逐艦は全て投入する」。この強い決意からでした。それでも空も海も米軍に握られている中で決行するのですから、撤収はよくて五千人、駆逐艦も半数は失うだろうと見ていたのです。それが奇跡的に成功し、陸軍九千八百人、海軍八百三十人と島にいた全員を収容出来ました。ラバウル航空隊がガ島を反復攻撃し、海上では第二艦隊、第三艦隊が陽動作戦をとったため、米軍は日本軍の新たな攻勢を警戒して、撤収作戦には全く気付かなかったのです。

七日の最終日は、最後の駆逐艦が将兵を乗せた後も岸辺をグルグる回って「誰かいるか、まだ乗る者はいないか」と大声で連呼しました。そしてブーゲンビル島に着くと、迎える者、迎えられる者、みんなただ泣いていたと云います。重症患者を運ぶ病院船氷川丸の上甲板には、一日二十回も三十回も便所に通う下痢患者のために臨時の便所が並んで設けられました。白衣の兵士が杖にすがり、よろめきながら何度も往復しましたが、誰一人ものを云いません。喋る気力も失っていたのです。十日のことですが、第八方面軍司令官の今村が将兵を見舞うため急造のテントに一歩足を踏み入れた瞬間、思わず息を呑んだそうです。そこには細い首、枯れ木のような手足の兵士たちが、影のように座っていたのです。まさに生ける屍でした。その夜、百武軍司令官が思い詰めた表情で今村を訪ねて来ました。「部下の三分の二を失い敗戦の責任をとることを認めてほしい」と云うのです。今村は静かに「お気持ちはわかりますし、止めはしません。ただ参考のため私の考えを申しておきます」と、こう云いました。この今村の言葉は一言一言、私たちの胸を打ちます。「一つは、ガ島で戦死した、特に餓死した一万数千の英霊のため、どうしてこんな悲惨なことになったのか、その顛末を詳しく記録し、後世の反省に役立たせなければ、英霊は行くべき所に行かれません。その記録を残さない自決は、部下に対する義務を欠きます。二つは、ガ島の敗戦は戦いによったものではなく、飢餓の自滅だったのです。この飢えはあなたが作ったものですか？　そうではありますまい。全くわが軍中央部の過誤によったものです。これは、補給と関連なしに、戦略戦術だけを研究し教育してきた陸軍多年の弊風が累をなし、すでに制空権を失いかけている時期に、祖国からこんな離れた小島に三万からの第十七軍を注ぎ込む過失を、中央は犯したのです」。

今村は続けました。「あなたの記録は、国軍戦術戦略の研究態度矯正にきっと役立ちます。またガ島で倒れた将兵のご遺族に、戦死の日と場所とその働きを知らせることは、必ずやらなければならない、あなたの責任です」。百武は涙を流し、時期については熟考することを約束しました。今村は立派な将軍でした。この今村の言葉には、ガダルカナル敗因の全てが語られています。しかし残念なが

ら、日本陸軍は「敗軍の将」の言葉などには耳を傾けませんでした。ガダルカナルで負けてもなお、同じ過ちを各地で繰り返していったのです。

このガ島戦での海軍の損害は、戦艦比叡、霧島など艦艇二十四隻十三万四千八百三十九トン、航空機八百九十三機、その搭乗員二千三百六十二人。陸軍は投入兵力三万三千六百人のうち戦死八千二百人、戦病死一万一千人でした。アメリカ側は艦艇二十四隻、十二万六千二百四十トン、戦死千五百九十八人、戦傷者四千七百九人だったと云われます。そしてこれ以後、日本軍は太平洋で主導権を握ることはなく、ガ島戦は太平洋戦争の折り返し点になったのです。